

新時代に入った豪州交換研修

株式会社建設技術研究所 管理本部副本部長
技術研修委員会副委員長 **金井 恵一**

昨年9月、FIDIC年次大会の開かれていたブダペストで私たちAJCEの5名のメンバーは、豪州協会(ACEA)の会長、次期会長、事務局長の3名と朝食の席で向き合っていた。目的は、2006年の交換研修が豪州側の事情によりキャンセルされたことに端を発した、研修制度の見直しと今後の方向性の議論。豪州側の「事情」の詳細がわからないまま、出発前の打合せでは制度打ち切りへの観測も出ていた状況下、若干の緊張感をもって臨んだ会合であった。

豪州との交換研修制度は、1995年に締結された日豪覚書に基づいて翌96年から始まった両国の若手エンジニアの相互訪問・研修のプログラムであり、ここで培われた人脈や関係を生かした共同ビジネス発掘への展開を目指したものである。以来、10年間にわたり合計90名を超えるヤングプロフェッショナルが学んでおり、FIDICの中でも成功例として注目を集めてきた研修制度である。ただ、10年の間に一種のマンネリ化が進行し、受入会社側は「お客さん扱い」、研修生側も「旅行気分」になりつつあったことは否めなかった。また、特に豪州側にとっては、10年経っても当初の目的のひとつであったビジネスへの展開が思うように進まなかったことも「事情」の重要な一項目であることは間違いなかった。

さて、前記の朝食会合であるが、幸いなことに豪州側も長期的に見た関係構築と人材育成の観点から、交流を続けることについては基本的に賛成であった。ただ、上述の問題意識は持っており、今後更に継続発展させるためには、いくつかの点で見直しが必要であるとの見解で一致、さらに議論を重ねた結果として、次のような改善案を実施することとなった。

(1)滞在中だけを研修期間と捉えるのではなく、事前に

数ヶ月の「対話期間」を設けて研修生と受入会社側がお互いに理解しあう準備期間とし、これも含めて研修期間と認識する。

(2)研修生選定に際しては、研修生、受入会社双方の業務経歴や希望等を十分に勘案し、ベストマッチの実現に努力する。

(3)滞在中の全期間をホームステイとすることは双方の負担が大きく、基本的に社員寮やゲストハウス、長期滞在ホテルなどを利用し、ホームステイは週末行事とする。

(4)将来のビジネスへの展開を可能にするためには、研修で作り上げた人脈を維持してゆくことが重要であり、研修終了後の事後フォローにも力を入れる。

以上の経緯を経て2年ぶりに6人の研修生を迎え入れた2007年の交換研修(YPEP2007)は、11月2日のヤングサミットでその滞在研修を無事終了した。改善案に沿っていくつかの新しい試みを実施したが、眼目のひとつである「対話期間」については内容の濃淡はあったものの、初日の全体会議での研修生の発表内容などにその効果が認められ、何より先にお互いにある程度予備知識をもつことでスムーズに滞在研修に入ることができたと考えている。また、宿泊は全員、都心のウィークリーマンションに滞在してもらったが、研修生にも好評で、この面での受け入れ側の負担も大幅に軽減されたものと思われる。今年は新企画の初回であり、今後関係者の皆さんからいろいろご意見をいただいた上で、更に充実した研修制度を作り上げていきたいと考えている。今回参加された研修生と受入に携わられた方々との良好な関係が末長く続き、交換研修を通じたネットワークが広がっていくことを期待したい。

日豪交換研修も今年は11回目にあたり、いくつかの新機軸を加えて新たな時代に入りました。これまでもそうであったように、本研修制度は、ひとえに会員企業の積極的な参画にその存続がかかっております。今回、受入れをご快諾いただいた各企業に対しあつく御礼を申し上げますとともに、今後より多くの会員の皆様のご支援をいただきますよう、お願い申し上げます。

事前研修期間：2007年6月～2007年10月

共通テーマ「日本～その姿と心～」を読んでレポート作成

個別テーマ受け入れ会社と研修生の協議による

訪問期間：2007年10月12日～2007年11月2日
(約3週間)

公式行事：10月12日 オリエンテーション 歓迎会
10月27日、28日 研修旅行(奈良・京都)
11月2日 ヤングサミット 送別会

研修生：24歳～31歳までの若手技術者 計6名

研 修 生		受入企業名
企 業 名	氏 名	
Arup	David Murchland	(株)建設技術研究所
Costin Roe Consulting Pty Ltd	Mark Wilson	いであ(株)東京支社
Costin Roe Consulting Pty Ltd	James Disher	(株)オリエンタルコンサルタンツ 関西支社
Maunsell Australia	Katherine Alexander	(株)オリエンタルコンサルタンツ 東京事業本部
QANTEC McWILLIAM	Nathan Scott	(株)長大 構造事業本部
Simpson Kotzman Pty Ltd.	Robert Spenceley	(株)森村設計 環境部



オリエンテーションでAJCEの紹介をする廣谷AJCE会長



歓迎会の様子

研修生に回答いただいたアンケートの要約を以下に示します。

YPEP2007 研修生アンケート結果要約

【質問1】

今回の研修では、研修生と受入会社側が事前に相互理解を深め、訪日時の研修が円滑に進むよう、事前研修としての「対話期間」を導入しました。あなたの受入会社との「対話」はうまくいきましたか。訪日への準備として、役に立ちましたか。

- ・「対話期間」は、素晴らしい事前研修であり、今後の交換研修に必須の要素である。技術的な成果には過度の期待を持つべきではないが、ある程度の期間対話を続けること自体に大きな意味がある。
- ・日常生活に関するトピックなども採り上げるとよいのではないか。
- ・メンターや受入れ担当者の写真を事前に送っておけば、親近感がもてるのでは。
- ・今後の研修生には、以前の研修経験者から話を聞く機会を設けてあげるとよいのでは。
- ・今回の事前準備の中で、最も重要な要素であった。対話のための時間がなかなか取れない事もあったが、この対話により訪日前のストレスが大分軽減された。
- ・全く知人のいない外国の会社に一人で3週間過ごす、というプレッシャーを和らげる意味で、とても良いアイデアである。
- ・「対話」の目的やガイドラインを示した方が、やり易いのではないか。

【質問2】

受入会社の研修プログラムはどうでしたか。期待していた成果が得られましたか。

- ・研修プログラムはよく準備されていて、日本の紹介、サイト見学、情報交換と議論など素晴らしい組合せだった。日本語のレッスンを組み入れてみるのも良いのではないか。

- ・執務環境はよかったが、時間をもてあまし気味の面もあり、サイト見学などを組み入れてもらえればよかった。また、メンターが多忙で、3週間同じ部署にいるのが申し訳ない気がした。他の部署や支社などにも回してもらえればよかった。
- ・プログラムは、多くの有益で興味深いサイト見学を含んでいて、素晴らしかった。両社のプロジェクトマネジメントの違いについて突っ込んだ議論をする機会がなくて残念であった。
- ・期待通りのプログラムで、こなしした課題、サイト見学ともに興味深く素晴らしかった。一点だけ希望をいえば、もっと構造デザインについて構造エンジニアチームの働き方を見てみたかった。
- ・期待を上回るプログラムであった。特に、複数の部門を経験できたことや、実際のプロジェクトに加わって働いたこと、サイト見学などが有益であった。

【質問3】

AJCE主催の公式行事（開会式・オリエンテーション・歓迎会、京都/奈良旅行、ヤングサミットなど）についてはいかがでしたか。

- ・公式行事は、うまく計画・運営されていて大成功であった。オリエンテーションは大変役に立った。ヤングサミットは目的が今ひとつ明確でなかったような気がする。
- ・オリエンテーション、ヤングサミットともに大変良かった。特にラウンドテーブルディスカッションは良い経験であった。ただ、時間が短かったので、例えば研修期間中にこのような機会を別途設けてもよいのではないか。
- ・京都/奈良旅行は素晴らしかった。よくオーガナイズされ、グループがうまく機能していた。お互いの親近感を深める良い機会であった。
- ・プレゼンテーションの中で、日本と豪州の違いを強調するものが多かったが、（私の場合）逆に日本と豪州の共通点がとても多いことを発見した。
- ・歓迎会と送別会（と二次会）がとても楽しく、今

回のハイライトのひとつ。

- ・日豪の働き方の違いに関するディスカッションは面白かった。時間が許せば、もっとディスカッションの機会があってもよかった。



送別会の様子

【質問4】

今回は、従来の全期間に亘るホームステイに替えて、ウィークリーマンションに宿泊していただきました。これについてはいかがでしたか。滞在中に何か困ったことはありませんか。

- ・ウィークリーマンションはホームステイよりも良いアイデアであり今後も続けるべきである。ただ、一晩か二晩のホームステイは経験してみたかった。
- ・素晴らしいアイデアで、特に一日の終わりに静かな個人の時間を持てるのが良かった。
- ・便利で、清潔で、居心地がよく、申し分ない。個人的には短期間のホームステイも経験することができ、ラッキーであった。
- ・ホームステイも、人や生活を知る上では良いが、やはり自由とフレキシビリティがある今回のような方法がよい。
- ・インターネットへのアクセスができ、またプライバシーも保てたことで、家族への連絡など気兼ねなくできたのは、大変よかった。

【質問5】

研修を通じて築いた受入会社のメンターや担当者との人脈を今後も大切に、長く継続的な関係を維持するためにどうしたらよいか、何か提案があればお聞かせください。

- ・研修生と受入会社側の双方が、関心を持って努力することが大切。
- ・研修生を送り出した会社と受入会社が、継続的に交換を行うこともよいのではないかと。
- ・すでに、帰国後対話を続けており、何の問題もない。
- ・対話継続は、研修の重要な要素であり、続ける努力をしていくし、再訪問もしたい。同じ会社から研修生が送られてくるのであれば是非お世話をし関係を保ちたい。
- ・ホスト会社とのコンタクトは今後も続けていく。同時に研修生の間でも友情が生まれたのは、よかった。また、今度上司が訪日する際にホスト会社を訪問することになっている。

【質問6】

その他、今回の交換研修について何かご意見があればお願いします。

- ・今回の交換研修が成功したことについて、AJCEとACEAに感謝したい。
- ・3週間は、個人的にも、双方の会社にとっても長すぎるのではないかと。2週間程度が適当ではないかと考える。
- ・大変に素晴らしい、価値のある、そして楽しい経験であった。
- ・事前に配られた書籍「日本」は、日本について様々な観点から知ることができ、「対話」と合わせて、事前研修として大変役に立った。
- ・今回の研修は大成功だったと思う。次回はぜひ日本からの研修生を受け入れたい。

特集：日豪交換研修報告

2007 年度日豪交換研修生受入報告

株式会社建設技術研究所 道路・交通部 部長
前田 信幸

はじめに

AJCE の 2007 年日豪交換研修プログラムとして、当社はブリスベンの Arup 社からデービッド マーチランド君を 10 月 11 日から 11 月 2 日までの 3 週間に亘って受け入れた。東京を中心として、コンサルタント業務の水・道路交通・建設マネジメント関連について研修を行い、同時に日本の社会、経済、文化についても同時に親んでもらい、日本のコンサルタントの姿を理解した上で、オーストラリアのコンサルタントのあり方を考えていくことを目的とすることとした。

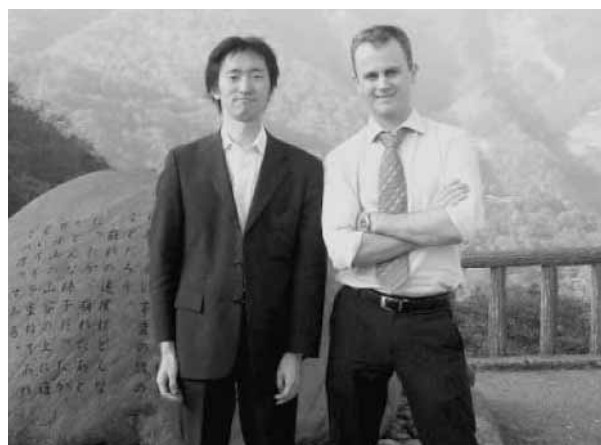
事前研修

これまでとは異なり、今年のプログラムから事前研修なるものが追加され、来日前に日本の姿や日本語についての最低限の学習を行うものであった。初めてのことであったので、試行錯誤しつつ、ダイアログ形式でお互いの国の紹介を皮切りにこの一連のダイアログをプレリミナリーフェーズとし、更に突っ込んだ議論をインテンシブフェーズで行なうように決め、一見完璧のように感じられたが、インテンシブフェーズに入ると日本に来てからやることがなくなる懸念が生じることとなり、事前研修ではあくまでも浅く広く行なうことの重要性に直面することとなった。

道路・交通部での研修

道路・交通部での研修は、4 日間実施しました。道路分野は、David 君の専門分野ではないこともあり、日本の交通状況、道路構造を体感することをテーマにして現場見学を中心に研修を行った。現場見学は、首都高や外環、東北自動車道、東京湾アクアライン等の高速道路見学、ゆりかもめや水上バスといった公共交通見学、いろは坂や山岳トンネル等の道路構造見学を行った。最

終日は、研修の総括として David 君による研修発表会を行った。発表会では、日本とオーストラリアの交通事情の違いについてディスカッションした。Round About と呼ばれる信号が不要な交差点、昼間は片側 3 車線の道路を朝夕のラッシュ時に全面一方通行にして効率的に交通処理をしていること等、日本にない道路事情を聞くことができた。



写真：現場見学にて

水システム部での研修

水システム部では計 4 日間の研修を行った。デービッドの専門が水分野であったことから、デービッドと私たち双方にとって有意義な研修となるよう、ディスカッションの時間を多く設けた。研修では、双方が準備したプレゼン資料等を用いて以下の項目について議論を行った。

日豪における水問題、洪水予測システム、正常流量について、水質浄化事業、リスクマネジメント、水循環モデル、エネルギー政策、公共部門の民営化、等

研修を通じて、日豪の自然環境・社会環境の違いを双方が知ることができたとともに、その環境の違いのために双方において優先的技術課題が異なる部分がある

ことも分かった。そのため、お互いにおいて技術的に進んだ点や、同じような問題で困っている点があることが分かった。また、彼が水分野の専門家であったことから、議論をする中で、われわれの仕事に対し、アドバイスやいろいろな指摘をもらうことができ、双方にとって非常に有意義な研修であったと確信している。加えて、これまでは、私たちの仕事は日本の中でしか評価してこなかったが、外からの視点を加えることで、今の仕事に対してもさらに自信をつけることができたことも予想外の成果であった。

さて、研修が成功裡に終了したことは、デービッドの事前研修の努力もさることながら、当部の多くの職員が本研修に参加し、時間を割いてプレゼン資料等を準備



写真：東京湾にて



写真：フェアエルパーティー

してきたことに拠るところも大きいと感じている。英語に不慣れな職員も本研修に参加し、場合によってはプレゼンの発表練習も行い十分に準備を行ってきた。準備を始めたころは、英語に四苦八苦し大変だと感じていたことも、研修が成功したことで、結果的にはその苦労も私たちにとって非常に貴重な体験となった。

最後に、デービッドと今後も連絡を取り合うことを約束し、研修は終了した。

おわりに

日本にはじめて来た彼にとっては不思議な世界の連続であったようであった。非常に礼儀正しく、わけのわからないであろう日本人の名前を必至に覚えている姿が印象的であった。また、感情をストレートに出してくれる面では非常に楽で、寿司を築地で食べている時の御満悦の表情から、納豆を口に入れて苦しむ姿まで様々な表情を浮かべていた。一見ただの遊び人にもみえたが、会議でプレゼンテーションをする眼は、「竜蟠虎踞」という感じを見せていたが、長くは続かないという欠点も有しており、その辺はYPEPで日本に来るにふさわしい感じがした。3週間にわたる研修の中で学んだことを活かして今後も更なる飛躍を遂げてもらうように祈るばかりである。



2007年度 日豪交換研修生受入報告

いであ株式会社 東京支社 水圏グループ
小林雄介

1. はじめに

YPEP2007日豪交換研修の一環として、当社はCostin Roe社のMark Wilson君(以下マーク)を受け入れ、約3週間の研修を実施しました。なお、今回の研修では、より充実した研修とするため従来にはなかった事前研修といった新たな取り組みも行われました。ここでは、事前研修、研修後も含めマークと交流した日々について紹介させていただきます。

2. 受入概要

受入研修生決定まで

マークが専門とする分野は幅広く、舗装設計・排水計画・建築物の維持補修など多岐に亘り、当社の得意分野と重なる部分も多く効果的な技術交流が期待できると考え、彼を受入研修生として希望することとなりました。

事前研修

事前研修ではメールにより、お互いの会社の技術的特徴・労働環境・実際に携わった業務等について幅広く話し合いました。まず、議題をスケジュールにまとめ事前研修の進め方について確認し合い、メールは概ね1～2週間に1回程度のやりとりを目標にしました。

こちらは英語でのやりとりに慣れておらず、また、マークも新規オフィス(Newcastle)へ異動したばかり(そこでは彼がたった1人の社員)で双方、かなりの労力を要しましたが、なんとかスケジュール通りに進めることができました。特に、マークは赤ちゃんが生まれたばかり(生まれてわずか3週間)だったこともあり本当に大変だったと思われれます。今になって振り返ってみれば、研修受け入れ側として確かに大変でしたが、顔は合わせられなくても連絡をとり続けているとどこか

親近感が沸いてくるもので非常に有意なものでした。

来日研修

《出迎え》 10/11にマークを成田空港まで出迎えたのがマークとの初対面でした。やっと会えるんだという期待もありましたが、それよりもとにかく英語が通じるか?しゃべれるのか?という不安で一杯でした。そんな中、遠くから手を振ってくる外国人。「誰だろう?自分に向かって振っているようにも見えるけど・・・」というのも写真とあまりに雰囲気、外見が違っていたので分からなかったのです。とりあえず「Nice to meet you」の挨拶は済ませましたが、やっぱり会話が続きません。何か話さなくてはと思い「写真と全然違うから気づかなかったよ(精一杯の英語でした)」というと、マークは「あー、あれは2年前の写真なんだよね!」などと陽気に笑っていました。私なら、「プロフィールに添付する写真は新しい方がいいかな」などと思ってしまうそうですが、そんな事は気にもしていない様子でした。何かオーストラリア人の朗らかさの様なものを感じとても印象的でした。

《研修開始》 最初の2週間は当社の部署紹介・現場見学・具体的な業務体験等を主な研修内容とし、最後の1週間はヤングサミットの準備を基本とした上で余った時間は自由時間としました。

具体的には日本の地形、地質、火山などと自然災害の関係についての講義から始まり、IT技術、水理解析手法、構造物設計、生物調査とその利用方法、気象予報などの技術紹介を行いました。現地見学先として山古志村、JH静岡施工現場、当社保有の研究所見学などを設定しました。

マークはいずれの紹介、見学にも強く興味を持っていました。英語の得意不得意に関わらず社員が

説明し、マークも様々な質問を投げかけ、活発な意見交換が行われました。このような会話を通して私達も刺激を受け、また、マークにとっても新たな知見を広げられたものと確信しています。

また、実際に「相模川の光ケーブルCCTV設置業務」にも携わり、現地調査、光ケーブル埋設ルート・CCTV設置箇所の検討から図面作成までこなしました。このような業務は幅広い実績を持つ彼にとっても初めての経験ということでしたが積極的に業務遂行にあたっていました。彼の強い意欲が感じられ、こちらにとっても非常に嬉しいものとなりました。

これら技術交流以外にも、宮崎駿ジブリ博物館、サーフィン、ディズニーシー、他の研修生との日光旅行と余暇を充分楽しんでいました。

AJCE主催による京都奈良旅行では他の研修生、各受入企業担当者とともに夜まで飲み、非常に楽しい時間を過ごさせて頂きました。ちなみにマークは飲み過ぎて次の日は二日酔いになっていましたが・・・。

《ヤングサミット》 研修最終日のヤングサミットでは各研修生のこの研修での体験談発表に続き、数人のグループに分かれ、AJCEから各グループに与えられた議題についてディスカッションを行いました。

私のグループは年功序列の賃金制度やコンサルタント業界の転職が議題となりました。ここで出た意見を以下に簡単に整理します。

- ・日本の転職率はオーストラリアに比べて低い。
- ・若手技術者の転職率が低いのは転職後の賃金の下がる人が多いというのが一因である。
- ・転職後も同種の職業につくことが多い。オーストラリアでは転職はキャリアアップの1つという認識がある。

《食事》 マークは殆どの日本食を抵抗なく食しており、生卵をご飯にかけて食べるのは生まれて初めてと言いつつもおいしいと言っていたことと、箸を非常に器用に使っていたのには正直驚きました。ただ、梅干しだけは食べられませんでした。

事後研修

事後研修(オーストラリア帰国後)にもマークと、ヤングサミットの発表内容、感想のとりまとめのため連絡をとりあい、とりまとめ報告をAJCEへ提出しました。

研修受入から体験したもの

マークとの技術交流はもちろんのこと、異なる言語、文化に触れることで日常と違った生活を送れるという点だけでも充分、意味のあるものとなりました。

3. おわりに

英語への不安で始まった研修ですが終了時にはそんな事はすっかり忘れてしまう程、研修生達と親しくなれた交換研修でした。最後に「またいつの日か会おう」と約束しマークとお別れしました。



京都の旅館にて

特集：日豪交換研修報告

YPEP-2007 に参加して

株式会社オリエンタルコンサルタンツ
社会環境事業部
神田 佑亮

株式会社オリエンタルコンサルタンツ
社会環境事業部
国際活動委員会 渡津 永子

1.はじめに

今回の YPEP-2007 では、弊社に Katherine Alexander さん(以下、ケイト)、James Disher さん(以下、ジェームス)の2名の研修生を迎えた。

関東支店(東京)にやってきたケイトは、長身で、笑顔がとても素敵な女性技術者である。こちらが恐縮してしまうほど真面目で勉強熱心な彼女は、日本への留学経験を持つロバートを除けば、研修生のなかで最も日本語が上手だったと思う。

関西支店(大阪)にやってきたジェームスも同様に長身であり、まさに「gentleman」の言葉が当てはまるナイスガイであった。



ケイトとジェームス

2.ケイトと過ごした3週間

ケイトと過ごした3週間は、私にとって、いつもとは少し違う緊張感のある日々であった。

特に印象深いのは、ある自治体における市民懇談会に、彼女とともに参加した時のことである。ケイトの同席を思い切ってクライアントである自治体の方をお願いしたところ、「金髪の美人ですか、ならば・・・」と快く迎え



ケイト(左下)に構わず懇談会は進む

て下さった。

1年にわたって開催されてきたこの懇談会は、和やかに議論が進む日もあれば、市民の熱い思いに行政が押され気味になる日もある。ケイトが参加したこの日は、いつにも増して行政側が市民のやり玉にあがるような展開であった。

行政側の意見を代弁したり、ヒートアップする市民の意見を調整しつつ、ケイトがどんな風にもこの場面を見ているのか内心ドキドキしていた。後で聞いてみると、ぴりぴりとした雰囲気を感じ、非常に楽しかったそうである。

ケイトによれば、市民の意見が熱いのも行政がなかなか方向性を明確に示さないのも、オーストラリアも同じだということで面白かった。

もちろん研修の一環として、東京都内や横浜の建物を見学したり、隅田川をくだり、毎日違うランチを楽しみながら、研修期間はあっという間に過ぎていった。

ケイトはその熱心さで、私たちが勧めるどんな日本料理も果敢にチャレンジしていた。お鮓やそば、カレーはもちろんのこと、納豆も平気な顔で食べていた。中でもすき焼きが一番気に入ったそうである。私も食べたかつ

た・・・。

ご飯を食べながら(たまにお酒も飲みながら)、互いの趣味や家族、友人のこと、学生時代の研究、仕事の悩み、今後のことなどいろんな話をした。

私にとってオーストラリアのイメージは、テレビや友人の旅行話、シドニーオリンピックの映像など、限定されたものでしかないことを改めて感じた。彼女が働くメルボルンやキャンベラなどは、地名を聞いたことがある程度でまさしく未知の世界であり、いつかとれるであろう休暇を待ち遠しく感じた。

彼女とした様々な話の中で、やはり気になるのは、オーストラリアでは女性技術者がどのようにキャリアを積んでいくのかということである。話を聞くと、ケイトの会社はなかなか働きやすい環境にあるように感じた。一方、日本の女性技術者の方には申し訳ないが、語彙が限定される分、私の話は少し大げさなことになってしまったように思う。

同じ技術者という点では、仕事のやりがいなど、違いよりむしろ共通点を感じる方が多かった。

3. ジェームスの大阪での研修

一方ジェームスは、オリエンテーションの翌日、昼には東京を離れ大阪に移動した。彼の専門が建築系ということもあり、大阪、東京、同じ日本ながら全く都市形態・建築形態が異なる2つの都市の特徴を焼き付けるため、午前中に六本木ヒルズから東京の都市を頭に焼き付けてからの移動となった。彼が見た大阪の印象は、「張りぼて」であったであろう。御堂筋に象徴される目抜き通りの美しさと、長屋に象徴される密集住宅地。これには驚いた様子であった。

翌日より3週間の研修がスタートした。ジェームスは都市交通分野、構造設計分野に関する国内外の幅広いプロジェクトに携わった。研修を通じ、彼は様々なことに感動を覚えたようである。以下にその一部を紹介する。

大規模な橋梁やトンネルが日本には多い

オーストラリアではシドニーハーバートンネルやシドニーハーバーブリッジなどがあるが、それ以外には大きなインフラはないとのことであった。そのため、橋梁やトンネル設計分野の技術はオーストラリアには集積していな

いようである。

オーストラリアでは数年の実務経験を積んだ後、一度大学院へ戻る

オーストラリアの技術者は大学院に入り直し、主にマネジメントについて学ぶパターンが多いようである。彼の派遣元の会社では、リーダーのほとんどは工学分野とマネジメント分野の Master を取得しており、マネジメントスキルを体系的に学び、実務に活かしているようである。

望ましいリーダーの姿は共通している?

よく働き、よく遊び、よく飲み、メンバーとふれあい、ビジョンを示し行動する姿が望ましいリーダー(上司)と認識しているという。これは世界共通か。

上記は私自身が、日本のコンサルタントの特徴を認識するきっかけにもなった。

4. 大人の修学旅行

研修も終盤に近づいた週末、研修生と共に京都・奈良旅行に参加した。前日の疲れから私は新幹線の中でひたすら眠りこけてしまい、富士山や岐阜羽島近くにある SANYO のソーラーアークを紹介しようと思っていたが始めから大失敗であった。

ケイト以外の研修生と顔をあわせるのは、オリエンテーション・歓迎会以来であったが、同世代の気安さもあり、市内観光、旅館での宴会と、時間が経つにつれてどんどん打ち解けていった。夜のカラオケでは、みんな真面目な顔をして日本語の字幕を目で追っている姿が面白かった。



酔っ払いが写したわけではありませんが・・・



平安神宮の庭園 毎年何人が落ちるらしい

私は学生時代を京都で過ごしたが、住んでいる間はなかなか観光する機会がなかった。ガイドさんの説明は、日本人でも知らなかったことが多く(それが日本の常識ですと紹介されると困ってしまうのだが)、非常に勉強になった。

5. 終わりに

他国の若手技術者との交流を通じて、現在の自分の状況や、日本のコンサルティング・エンジニア業界などを、違う角度から見つめ直すことができた。また日豪の参加者に共通して、技術者としての高い意識を持って

おり、非常に刺激を受けた3週間であった。今後学ぶべきことや、働くフィールドの広がりを感じた。

私とケイト、ジェームスとの共通の課題としては、この経験を「個人として今後の職業人生にどう活かしていくか」、そして「自分の周りにどう波及させていくか」ということである。

これから真夏のクリスマスを迎えるオーストラリアに思いをはせながら、個人のつながりだけでなく、会社や各国協会が交流を深め、次年度以降の本研修の益々の充実・発展に繋げていけたらと思う。

(1. 2. 4. 5 渡津 記、 3. 神田 記)

特集：日豪交換研修報告

YPEP2007 Nathan Scott 氏との出会い

株式会社 長大
 構造事業本部 東日本構造事業部
 名古屋構造技術部 部長 **加藤 雅彦**

株式会社 長大
 構造事業本部 東日本構造事業部
 構造計画 2部 主任 **大山 満弘**

株式会社 長大
 社会計画事業本部 西日本社会計画事業部
 社会・環境計画部 **笠松 扶美**

1. はじめに

筆者(大山)は、AJCE-ACEAの日豪交換研修では来日した豪州技術者との社内交流会に参加したことがあるものの、研修生の受入れを直接担当するのは初めての経験である。今年からは「お客様扱いではなく、より中身のある研修を」という日豪両協会の合意の下、研修は来日期間だけでなく、来日前よりeメール等を通じた事前研修から行うこととなった。受入れ担当自体初めての経験でもあり、今ひとつ掴み所がわからぬまま、受入れを共に担当する同僚と話した結果、「とにかく、形だけの研修ではなく、薄くてもいいから研修生本人が少しでも何かを掴んで帰れる内容を探ろう」、また「我々受入れ側自身も何かを得られる研修をしよう」ということにした。

2. 事前研修

弊社が受入れを担当したNathan Scott氏は、OPUS QANTEC McWILLIAM社に所属する31歳の構造技術者である。初期のメールのやりとり等で来日経験はないとわかったので、事前研修では、同僚が見つけた、日本(&独国)型資本主義とアングロサクソン型市場主義について比較した本を読んでもらうことにした。(実は、英語版と和訳版の両方があるのもこの本を選んだ理由の一つである。)

著者のRonald Doreは英国人であるが、日本に対し非常に造詣が深く、日本に関する著作も多い。Nathan自身この本は大変興味深かったと言っていたが、研修初日のオリエンテーションミーティングで彼のプレゼンテーションを見た他の研修生の中にも、興味を示した人が

何人かいたようである。また、今後いろいろな形でますます海外との交流機会が増えるであろう我々日本人エンジニア自身にとっても、非常に興味深い内容であったと思う。

3. 来日研修

来日中の研修としては、二つのテーマに取り組んでもらった。一つ目は「橋梁の耐震設計基準の比較」、二つ目は「日豪の建設事業の発注・契約方式の比較」である。

一つ目のテーマを選んだのは、豪州自体は地震の頻度は小さいが、豪州とニュージーランドは共通の設計基準を使っている部分があるらしく、地震国であるニュージーランドの基準との比較ができるのではないかと思ったからである。また、当初は耐震設計基準のみの比較を考えていたが、Nathan自身のアイデアにより、地震荷重以外の一般的な荷重の規定についても比較を行ってもらった。このおかげで新たな知見が得られた。豪州では橋梁設計では地震荷重が支配的でない代わりに、潜水橋(洪水時には河川の水中に沈下する橋)が珍しくないため、水の荷重が桁等の設計に支配的となることが多いということである。ところ変われば構造物の設計も変わる。興味深い情報であった。

これら彼が研修でまとめてくれた内容については、弊社内での研修最終日(11/1)に社内の構造関係者の前でプレゼンテーションを行ってもらった。普段は海外のエンジニアと交流する機会が必ずしも多くはない我々であるが、彼我の共通点・相違点などを含め、多少なりとも刺激を受ける機会となったかと思う。

4. ホームステイ

諸般の事情により、Nathanのホームステイは研修地の東京ではなく、弊社名古屋支社のメンバーに引き受けてもらい、自分も同行した。以下、10/20～21の2日間、ホストファミリーとしてNathanを厚くもてなしてくれた名古屋支社・加藤さんからの報告である。

Mr. Nathan Scottのたった二日間の我が家へのホームステイ。名古屋は、大いなる田舎と呼ばれ、遠く江戸の時代から変わりなく質素・儉約、言葉を替えれば地味で堅実でも、いまや東京に負けず劣らず、派手な独特の文化を創りあげている。そんな名古屋をMr. Nathanはどう感じたのだろうか。今回の海外企業研修においてサポーター役の大山氏と共に追ってみた。

現代名古屋考

都市計画、インフラ整備に携わるMr. Nathanにまず見せたのは現代建築の象徴である超高層ビル、セントラルタワーズとミッドランドスクエアビル。Gを感じさせない超高速ELVで最上階まで一気に昇ったが、期待に反して制御技術に関心などみせず、さすがの速度にMr. Nathanも圧倒されたようだ。また、外壁は大型の総DPG貼り、日本のフロート技術のすごさも判ったかなー!?



昨今の名古屋の元気は、やはり自動車の世界的大御所「トヨタ」なしでは語れない。そのルーツであるトヨタ博物館に足を運んでみた。焦土と化した戦後から日本一の工業地帯を築き上げた中部だが、その中枢はトヨ

タをはじめとする中部の製造技術であり、地道に堅実に働く名古屋気質と企業精神が中部の発展を支えてきた。ここにある豊田喜一郎の銅像を前に、創業当時から現代のトヨタグループに脈々と受けつがれているものづくり精神は、「情熱」という無限動力が根底にあることを知った我々は、目と目で明日からのお互いの頑張りを誓いあった!?!のだ。



名古屋城、その風格と美しい容姿は、Mr. Nathanを一発で虜にした。「名古屋城」と達筆で書かれた扇子(英語でfanと言う)をみやげに持たせたが、地元民が恥ずかしくて人に見せられないようなものが、外人にはカッコよく映るのが極めて悔しい思い出である。



ついでに、外堀で売っていた「たこやき(大阪名物と書かれたのれんが少々悲しい)」をはしゃいで食べる姿は特筆ものだ。



我が家での一コマ

Aussie Beef を食べ慣れた Mr. Nathan に、これに対抗して特選国産牛によるしゃぶしゃぶをご馳走した。10年前にPFI視察のため訪れたオーストラリアの思い出話(Kings Cross と錦三はどちらがすごいかなど)を酒の肴に、豪州ワイン / Penfolds はまたたく間に空いてしまった。

気付いてみると、大学2年生になる我が娘は、小学教育論と趣味のバトンの話を、また、高校2年の息子は、野球部について、カタコトの英語で、ちゃっかり逆研修を実施していた!?



Mr. Nathan の好き嫌い

(今後の海外研修生の参考資料として)

: 馬糞の山菜そば、水車、たこやき、デニーズのおもちゃ[電子ギター]、ラグビーW杯、犬の散歩グッズ 等
: 白玉ぜんざい、そば屋のクラシックBGM 等

5. 京都・奈良ツアー

10/27 ~ 28 の京都・奈良ツアーは、弊社では西日本社会計画事業部の笠松さんに付き添いをお願いした。ツアーでの研修生たちの様子を彼女に聞いた。

10月27日午後1時半。新都ホテルに到着するも、知った顔が見当たらない。東京出発組はみんなでランチをしていたらしく、遅刻ギリギリで、バスに乗り込みました。

残念ながら、雨が降ったりやんだりでした。しかも、今日から夜間参詣の始まる寺社もあり、京都は観光シーズン真っ只中。かなりの混雑具合...。しかし、外国人専用ツアーなので、私たち以外の参加者は全員外国人。最初から、ハイペースで写真撮影してました。

Australian たちは、三十三間堂では、1,000体の仏像より先その後には展示されている、お堂の模型や建築の仕組みなどに興味深々。でも、写真撮影が制限されているところが多く、残念そうでした。

最後は清水寺。この頃には、みんな好き勝手に行動していましたが、バスに戻ってきた Australian たちが、片手に缶コーラ(苦笑)。日本人はお団子を堪能していました。



旅館に到着し、宴会タイム!ここで、お昼は気配を殺していたK大先生が大活躍。一気に盛り上がり、、2次会は、カラオケ。最後に日本人で君が代を歌い...残念ながらオーストラリア国家は入っていなかったのも、オーストラリアで有名な曲をみんなで歌ってくれました。



その後、旅館の部屋で3次会。みんなパラパラと眠りに着く中、最後は3時前まで騒いでいました。

翌朝、朝食に起きてきたのは、昨夜早々に引き上げたメンバーのみ...。Australian4人は集合時間にも間に合わず、タクシーで最初の観光地、二条城まで駆けつけることになりました。。ってことで、今日も遅刻スタートの

ご一行です。

でも、二条城の庭園では、廊下の下にもぐりこんでウグイス張りの写真を撮っていたり、、やっぱり構造物には興味深々の様子。



この日は、ハードスケジュールで、午後からは奈良。相変わらず勝手に行動していたのですが、やっぱりみんなお疲れの様子でした。バスの中では、みんな爆睡(たぶん)。



Australianたちは、たこ焼きがお気に入りの様子。東大寺でみんな食べてました。大阪へ来ればもっと安くてもおいしいのに...

奈良も相当な混雑で、帰りは渋滞。なかなか車が進まず、気がつく、、爆睡。

京都駅に帰り着き、東京組とはここでお別れです。楽しかったけど、、疲れました！

6. おわりに

Nathanは物静かな好青年であった。一緒に受入れを担当する予定だった同僚が急遽海外に長期出張になっ

たり、自身の業務スケジュールとの狭間で半ば放ったらかしのような状態で研修をさせてしまった部分もあったが、そこは同じ構造エンジニア、忙しいのはお互い様と気を遣ってくれたようで、提案したテーマに対して黙々と真摯に取り組んでくれ、必要に応じ鋭い質問をしつつ、短い研修期間ながら成果をまとめ、受入れ側の我々に対しても貴重な情報をもたらしてくれた。

また、たまたま都合が合わず、弊社が携わったプロジェクトの施工中の現場に連れ出してあげられなかったのが残念であるが、研修最終日、先述の社内プレゼンテーションの後、せめてもの橋梁見学ということで隅田川の水上バスに乗りに行った。「橋の博物館だね」と彼が興味津々に写真を撮っていたのが、至らぬ受入れ担当であった自分への救いである。また他社(森村設計さん)からのオファーにより建築の現場を見せてもらい、彼も満足していたようである。

隅田川から事務所へ戻った後、ささやかながらNathanの送別会を催した。彼の研修中はなかなか彼と会話を交わさなかったメンバーたちも、お酒が入ったこともあってか、言葉の壁など何のその、非常に活発に彼と談笑していた。実はタイミングを外して社内での歓迎会をやりそびれ、それ以降もなかなか一緒に飲みに行ったりできずにいたのだが、これを最初にやっておけば研修中に社内での話し相手がもっと増え、業務以外の部分でももっと内容の豊かな研修にしてあげられたのではないかというのが若干の反省である。次の機会の改善事項の一つになればと思う。



(文責 1~3、6:大山、4:加藤、5:笠松)

特集：日豪交換研修報告

2007年度日豪交換研修生受入報告

株式会社森村設計 海外グループ
今野真希

「Aussieのエンジニアリングって...違うのかな。」というほどレベルの低い、というよりそもそもノン・エンジニアである私が、「大丈夫、どうにかなるから」という社内エンジニア達からの温かい周りの言葉に「騙され」2007年ヤング・プロフェッショナル・エンジニア・プログラム(YPEP)研修生の「メンター」を任されたのは6月のこと。そんな私と数回にわたるメールや課題のやり取りを経て、Robert Spenceleyは森村設計(PTM)にやってきた。彼はオーストラリア・メルボルンにあるSimpson Kotzman Pty.社の機械設備設計エンジニアである。他の研修生の到着より4日早い雨振りの体育の日、「御歳暮」と書かれたTシャツ姿で彼は、無事日本へ到着。

同じ言語を話す者同士でも初対面は構えてしまいがちだが、Robertは相手に緊張を感じさせない不思議な落ち着きと礼儀正しさを持ち合わせていた。見習いたい限りである。彼の日本語は予想以上の高レベルで、レストランの簡単なメニューや駅の表示も理解することができ、「これは一人でもどこへ出しても困らないなあ」と、私はニンマリ。

今回の研修では、Robertを「海外グループ(外資系クライアント対応)」の英語ネイティブスタッフの中に座らせるよ、国内グループのメンバーと席を並べて「日本的な」仕事方法を学習してもらおうとした方針が功を奏した。彼は現場見学で様々なものを目にするだけでなく、ドメスティックな設備設計コンサル会社の文化にも触れることができたようである。私の仕事が彼の機械設備設計と直接関係がないために仕事で一緒となることは少なかったが、彼は毎日「今日はこんな現場に行ってきた物を見てびっくりした」とか、「こんな事を学んだ」と報告に現れ、最後にはこちらが教えた通り、「お疲れ様でした」と帰って行った。



以下、彼が研修中に学んだことを抜粋する。

(テクニカル編)

- ・オーストラリアの建築物はコンクリート造りが一般的であるが、日本ではスチール造り。工期を短縮でき、地震に強い。
- ・行く先どこでも空調システムをチェック。特に六本木ヒルズの吹き出しは「カッコイイ」。
- ・技術への追求という姿勢を持つ日本人は素晴らしい。それに対するハードワークを惜しまない。特に省エネに対する姿勢が素晴らしい。

(カルチャー編)

- ・「乾杯!」は宴会の時に言うことが多い。職場の人と帰りに飲む時は「お疲れ様です」という。「ちょっとだけ」とか「軽く一杯」誘うことが多いが、一杯以上飲んでも構わない。
- ・出張に行った人はお土産を買って帰る。甘いものが多い。
- ・日本人が電車の中で寝るのは知っていたが、会社の昼休みにも机に伏せて寝ている人がある。現場の職人さんは床に転がって寝ている。

メルボルンにあるRobertの会社は小規模な設備設計



コンサル会社であるが、PTMもまた YPEP ホスト会社の中で一番小規模である。そのためか彼は始めから違和感なく会社に馴染んでいたようだ。自分の会社にはない自前の CAD スタッフや建築家がいることで、PTMの方が仕事をしやすいのではないかと、との意見を述べられたが、私としては彼の社長が毎週金曜日の夕方に社員へビールを用意してくれ、みんなでそれを飲みながら交流するという方が数段羨ましい。とはいえ金曜日の夕方はまだまだ仕事に追われて目を回しているし、社員数と飲酒量を考えるとかなり非現実的な話ではあるのだが。

こうして Robert の PTM での研修はあまりにも順調に、そしてあっという間に過ぎてしまった。高校時代に大阪で1ヶ月のホームステイを経験していた彼だったが、こ

の3週間の研修を通じてよりよく日本文化を理解することができたとし、何よりも日本のエンジニアリングとビジネス文化を体験することができたことを非常に喜んでいました。

個人的に仕事が詰まっており、あまりじっくり彼の相手をしてあげることができなかったという反省は残るが、それでも私たちは様々な意見や情報の交換ができたと思う(周囲からは一方的に私が変なことを教えているという指摘もあったが)。彼が無事に帰国し、これを書いている今、正直なところかわいい弟がいなくなってしまうような、ちょっとした喪失感を覚えている(彼は私の弟と同年)。ヤング・サミットのディスカッションのトピックのとおり、Multi-cultural な現代では相手を理解しようとする Attitude や Respect が、言語の壁を越えた交流の鍵となるのであり、彼にとっても私にとってもそれを実感できた研修となったことは間違いのない。

最後に。我が社には YPEP の元研修生というオーストラリア人が働いている。日本を(または PTM を)気に入ったからか、翌年戻ってきたそうだ。実をいえば、私には彼に誘われて PTM へ入社したという経緯があり、今回の Robert との出会い共々 YPEP にちょっとした想いがある今日この頃である。



特集：日豪交換研修報告

ヤングサミットについて

株式会社日水コン 下水事業開発部
技術研修委員会幹事 **秋永 薫児**

ヤングサミットは11月2日の午後に行われました。研修生の報告を各15分で行い、休憩を挟んで、討議を行いました。報告はうまく内容を整理されており、時間通りの進行をすることができました。休憩時間には持ち寄った和菓子を楽しみながら、メンター以外の若手参加者も含めて歓談することができ、その後の討議においてリラックスした雰囲気を作ることができました。討議では、テーブルを3つに分けて配置しておきましたので、開始時点から座ったテーブルの仲間で行いました。トピックスは2つ用意しており、おのおの説明5分、討議15分として、各テーブルの代表（豪州研修生）がラップアップを行うという手順を進めました。トピックス1は、Human Resource and Capacity Buildingとして、2国間の文化、習慣の違いを比較しながら、人材育成には何が重要であるのかについて、討議してもらい、トピックス2では、Living in multi-cultural world と題して、グローバル化の進む中で、多文化の中での活動が要求されるという状況下で、いかに現地スタッフとコミュニケーションをとっていくのかについて議論してもらいました。議論は予想以上に活発で、皆真剣

に取り組んでいました。15分では時間が足りなかったようです。ラップアップでは討議結果をまとめて発表してくれましたが、ユニークな意見が出て、楽しい時間をすごせました。ラップアップについては、別途研修生からの報告が掲載されますので、ご覧ください。

最後に、FIDIC - YPFについて紹介を行い、この豪州研修がFIDIC活動の一環であること、世界の若手がどのような活動をFIDICで行ってきたかを説明しました。

ヤングサミット式次第

時刻	項目
13:30-13:50	挨拶、式次第説明、研修生/参加者紹介
13:50-15:45	研修報告 一人15分 6名
15:45-16:00	休憩
16:00-17:00	討議、およびラップアップ
	トピックス1：Human Resource and Capacity Building
	トピックス2：Living in multi-cultural world
17:00-17:05	休憩
17:05-17:20	FIDIC-YPFについて（10分発表、5分Q&A）
17:20-17:30	事務連絡と閉会挨拶

ヤングサミットの感想

ヤングサミットの感想をメンターの方々より頂きました。ここに紹介させていただきます。

1) ヤングサミット全体につきましては、次のような意見、感想をいただきました。

各研修者の研修内容発表は非常に興味深く、全ての研修者が様々な経験ができた。日本での研修の様子を知り、彼らの評価を聞くことができ、次回の研修の糧とする良い機会であったと同時に、世知辛いビジネスから離れた世界でのこういう嬉しい話が必要だと思う。3週間という短期間をより効果的なものにするために、メン





ターや各社の考えがいろいろ違って、おもしろかったし、会社と研修生のバランスもよかったように思う。

2) テーブル討議の概要と頂きました意見、感想は、次のとおりです。

トピック1 : Human Resource and Capacity Building

転職に関して、日本ではまだ低く、転職後の賃金が下がる人が多いというのが阻害要因の1つになっているようだ。オーストラリアではキャリアアップ、より良い労働環境、高給、自分の技術力の向上のため転職する、という。また、豪州研修生からは、いくらキャリアを考えるにしても、転職を繰り返す人が多いことを指摘していた。逆に日本側から、最近転職は珍しくなくなったが、それでも見えない壁があることが持ち上がった。さらに、年功序列システムが若手技術者にどう影響しているかの議論がされ、一般的に、日本では年長者がマネジメント

を担うことが多いが、豪州では意欲や素質のある者は年齢に関係なく機会が与えられる、日本では年少者が高い地位に就いた場合に、コミュニケーション上難儀が生じる場合もあるなどの議論をした。豪州では工学系でも大学のカリキュラムでマネジメントに関する講義等があるという。

トピック2 : Living in multi-cultural world

言語の異なる海外での仕事を進め方について議論し、会議、発表を通じて、また図面を用いてコミュニケーションを図る事が海外業務を成功させる要因の1つである、異文化、異なる社会的価値観に対する理解とそれを受け入れる寛容さが必要である、根気が必要不可欠である、世界の共通語は数学である、といった意見が出て、言語レベルよりも、相手を理解しようとする「Attitude」や、相手の文化を尊重しようとする「Respect」を持つことで、ボーダーレスなつながりが生まれるであろうとの結論に達した。これはビジネスのみならず個々のつながりにおいても同様であろう。

短い時間にいろいろな意見交換をしている様子が良くわかりました。議題を絞り込んだつもりでしたが、漠然としていたと感じられる方々もいらしたようです。1回の討議が短すぎたようですので、今回は、議題の吟味と時間について検討を行ないます。今回の成果を生かして今後も有意義な交換研修会にできるよう尽力いたします。



国際活動寄稿

FIDIC 年次報告書 2006-2007 版 (FIDIC Annual Review for 2006-2007) 抄訳

訳責：国際活動委員会 IFI 分科会

FIDIC 年次報告書 2006-2007 年版が例年通り発行され、シンガポール大会で配布された。この報告書は、シンガポール大会前1年間の活動を総括報告するものである。例年と同じく表紙を含めて12ページ構成で、本文は1ページを会長からのメッセージ、5ページを委員会・作業部会・フォーラム報告、3ページを事務局

報告、残りをコラム、主な催しや会員協会 (MA) のリストなどに当てている。以下に、その本文を抜粋して紹介する。

原文

： www1.fidic.org/resources/representation/annualreview/

抄訳： www.ajce.or.jp/fidic/annual/fidic_annual_2006-2007.htm



1. 会長からのメッセージ

コンサルティングエンジニア (CE) - よりソフトなイメージへ -

FIDIC 会長の Jorge Diaz Padilla が、退任を前に以下のようなメッセージを寄せている。

この1年間は実践・戦略両面の問題に果敢に取り組み、それが報われた年であった。昨年、私はコラボレーションとパートナーシップの大切さをとなえた。そ

して、これはシンガポール大会のテーマにもなっている。FIDICの戦略的な事業の多くは、多くの人々のサポートに頼っている。ここでの重要な仕事は委員会形式にこだわらず、しばしば表に出ないまま行われる。理事会は各責任者との間でインターフェイスとして機能する。

公正で透明性のある調達がCE業界の根幹である。グローバル化が進み、技術的なサービスが民営化されていく大きな動きの中でも、未だにCEは施主側に立

つことが多い。それ故にCEは施主側から不正な要求を突きつけられた時には厳しい立場に立つことになる。FIDICは世界技術者連盟と協議を行い、汚職と戦い、持続可能な開発を促進してきた。よい契約約款は施主、建設請負業者及びコンサルタントにも重要である。それらのバランスと公正さを確実にすることは契約約款委員会の重要な任務である。また、FIDICは建設請負業界を代表する世界建設業連盟（CICA）と協議を行い、汚職に対する共同声明を発表し、汚職防止促進ツールの導入を計画している。

多国間開発銀行（MDBs）はまだ世界のインフラ整備において支配的な役目はあまり果たしていないが、多くの国で調達決定時に影響力を持っている。隔年で開催されるFIDICとMDBsの会議、BIMILACIは5月にワシントンで2日間にわたり開かれ、品質に焦点が当てられた。銀行間の協調はかなり進んできたが、品質についての理解と定義についての取り扱いには難しい面があることが判明した。FIDICは施主が高品質のサービスを期待しているとの認識に立ち、原点に戻って施主が「どうしたいのか」ではなく、「何を達成したいのか」との質問に心がけた。また、FIDICはMDBsに対して「コンサルタント選定における価格の影響」、「調達における持続可能性の問題」、「汚職と戦う実践的な手段の不足」、「不適切な合意によるコンサルタントへの不公平なリスク負荷」そして、「支払いの遅れの負の影響」についての理解を強く求めた。

多くの会議は実務的ではない議論に終始することが多い。FIDICは汚職の問題と持続可能性の問題に対応するための実務的なツールPIMS（Procurement Integrity Management System）とPSM（Project Sustainability Management）を開発し、普及に努めている。

FIDICと業界が取り組むべき大きなチャレンジは、重要な問題は何かを理解することと、声をそろえて話すこと、そして同じ問いかけをすることである。FIDICは地域の業界に対し、より効果的な声を届かせるのに最もよい方法は何かについて検討している。これはアフリカやアジアのMAグループのためにヨーロッパCE協会連合（EFCA）との協力関係、FIDIC中南米アメリカ連合（FEPAC）との交流を進めるに当たり、新し

い注目点となった。

同時に、CEはよりソフトなイメージを与える必要がある。1つには技術の専門家や問題の解決者というよりも、貧困の軽減や気候変動問題に取り組むことによってより良い生活の提供に貢献していることを強調することである。私の役割が終わりに近づいてきた今日、この動きと我々のサービスがこれまでになく求められていることを強く感じている。私は、皆さんに感謝するとともに、後任の皆さんがよりポジティブな将来に向けて業界を率いていくことを願っている。

2. FIDIC 各委員会、作業部会及びフォーラム活動報告

様々な委員会活動について報告している。冒頭に「すべての委員会はボランティアにより構成されており、参加したい人の応募を歓迎する」旨の表明がある。以下に報告の概要をまとめた。

2.1 紛争裁定人評価委員会：

主な目的は、契約約款の適切な運用を支援する有能で経験豊かな紛争裁定人を揃えておき、要請に応じてその指名を手助けすることである。評価ワークショップを2006年末に行い、8ヶ国から12人の会長リスト入り候補者を推薦した。

2.2 ビジネス実務委員会：

CE業界全体に適用できるパートナーリングにおける専門職リスクに関するポリシーガイドラインや参考資料を作成してきた（www.fidic.org/policies）。「PFIプロジェクトにおける実践ガイド」（電子版は公開済み）の検討も継続している。「コンサルタント選定における価格要素重視の問題」の本質は、要求される業務内容とコンサルタントが提供する業務内容の取り決めに明確さが欠けていることにある。新しい「業務範囲定義ガイド」は、業務範囲を全て記述できるツールと各作業段階を定義する標準を提供している。内容は2007年のシンガポール大会で発表し、2008年に出版する予定である。

2.3 契約約款委員会：

多くの作業部会を擁して既存文書の見直しと新規文書の準備を活発に行った。2006年末に「コンサルタント標準契約約款」(White Book)の第4版を発行した。「DBO契約約款」のセミナー限定版はシンガポール大会でのワークショップに合わせて発行される。新しい「調達手順ガイドライン」、「JV契約書」、「サブコンサルタント契約書」、「土木工事下請契約約款」の新版の準備も順調に進んでいる。多国間開発銀行協調版建設契約約款は高く評価されており、ライセンス下でMDBに普及している。フランス語、スペイン語、ポルトガル語翻訳版の準備も進められている。二国間組織での使用にも拡大の動きがある。

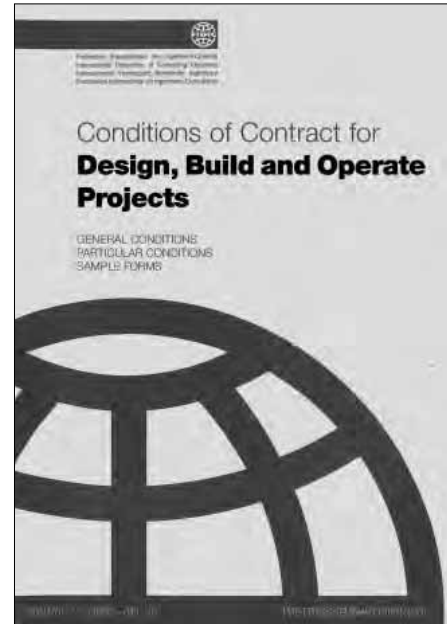
2.4 持続可能な開発委員会：

プロジェクト持続性管理 (PSM) の推進に関し、委員会は全体的な問題解決策と、持続可能性の観点から創造し、設計し、視覚化するための新しいツール、具体的にはプロジェクトの選択肢、利益、そして新しい手法の問題点を分析するためのツールを開発中である。今後はCE会社向けの新しいPSMガイドラインと、PSMの適用事例集作成に着手する予定である。

2.5 若手専門職フォーラム (YPF)：

主にインターネットを通じて活動してきたが、ニュースレターも幾つか刊行し、FIDICメンバー

に配送してきた。MAの増加に伴い、それぞれが若手専門職用プログラムを持つようになり、YPFのネットワークを使って他の協会と情報を交換し、互いに学んでいる。YPF活動継続のために、メンバー各位の助力とアイデアの提供を要請する。



DBO Contract Prepress Seminar Edition (2007)

3. 事務局報告/持続的な業績

前半は出納長の Maxime Mazloum と常務理事の Enrico Vink がそれぞれ出納長報告と常務理事報告を行っている。後半は、FIDIC事務局が事務局活動、eFIDIC研修システム、研修会、および書籍販売について報告している。

韓国協会 2007 年国際セミナー講演（報告）

KENCA 2007 Professional Engineers Seminar in Jeju

株式会社建設技術研究所 常務取締役

AJCE 副会長 内村 好

韓国エンジニアリング・コンサルタント協会“ Korea Engineering & Consulting Association(KENCA) ”からの講演依頼があり、廣谷会長の代理として講演を行ってきました。事務局長の山下氏も同行し、KENCA との交流を促進してきました。KENCA の国際セミナーは、毎年一回開催されており、海外の招待講演と下記に記述する諸外国の政府や企業関係者を招待したビジネス会議から構成されており、韓国 CE の海外展開の幅の広さと意欲を感じました。

日 時：2007 年 11 月 9 日(金)～ 11 日(日)

会 場：韓国済州島グランドホテル

招待講演：John Boyd(FIDIC 会長)、内村好(AJCE 副会長)

Ir. Ronny Trianggono(インドネシア、VIRAMA KARYA 役員)

海外招待者：インドネシア、ベトナム、ラオス、アゼルバイジャン、カザフスタン

KENCA 参加者：Cho KENCA 会長はじめ KENCA 参加企業の代表者や幹部約 150 名

KENCA

工業技術法により 1974 年に設立され、現在、3,400 社、10 万人のエンジニアを擁する協会が韓国を代表して FIDIC に加盟しています。構成は 6 割が建設であり、コンサルタント専業社、建設会社や製造会社のコンサルタント部門、公社からなっています。

AJCE 講演の要旨

AJCE からの講演は「日本の社会資本整備とコンサルタント産業」と題して下記の内容の講演(30 分)を行いました。

- ・建設投資の減少傾向の中での社会資本整備の課題と方向性
- ・その中でのコンサルタントの役割の重要性と変化
- ・日本のコンサルタント産業の現状と課題
- ・コンサルタント調達方式の QBS へのトレンドと FIDIC の支援
- ・日韓コンサルタントのこれからの協調
- ・講演の後、韓国協会員より下記の適切な質問(20 分)があり、日本でのビジネスチャンス拡大の意欲と近い将来日本と同様な状況下に置かれる韓国のコンサルタントの課題を感じました。
- ・技術者資格の相互認証問題など日韓コンサルタントの協調の具体策について
- ・予算減少下での社会資本整備に対する政府とコンサルタントの取り組みについて

日韓の交流

今回、同行の AJCE 山下事務局長ともども暖かい歓迎を受けるとともに、彼我の協会の実力差を身をもって感じました。しかしながら事務局や会員企業幹部との人的交流が図れたことは、大変有意義であり、双方の立場や力の違いを前提としての協力関係の構築が大事であると考えます。当面、来年 4 月に韓国で開催される TCDPAP への参加ならびに ASPAC での活動、2012 年に予定されている韓国の FIDIC 大会開催の支援を行うことで、さらに交流が具体化していくものと思います。

あとがき

従来、ソウルで開催されていた国際セミナーも温暖で韓国有数の観光地である済州島で昨年からは開催されているとのこと。その理由を聞いたところ、多少経費はかかるがソウル開催では参加者がたびたび携帯電話で呼

び出されて落ち着かないので開催地を変更したとのこと。このあたりはどこの国も同じだと感じました。土曜日のセミナーのあと翌日は、いくつかのグループに分けてゴルフや登山、観光などを楽しんでいました。また、今回のセミナーには女性の参加者を殆ど見かけません

でした。韓国は女性の進出が日本より進んでいるかとも思いましたがコンサルタント産業ではまだのようです。

帰途ソウルに立ち寄り、清溪川(チョンゲチョン)の再生事業を視察してきました。都市河川再生事業として余りにも有名となっていますが、一見の価値があります。



左から山下 AJCE 事務局長、沈韓国水資源水質研究所所長、
内村 AJCE 副会長、KENCA Chang 副会長

シリーズ・FIDIC 契約約款の紹介

その1 FIDIC レインボー

AJCE 事務局

世界銀行、アジア開発銀行、国際協力銀行などの融資機関や、海外の政府調達部門が、プロジェクト融資の基本とし、調達部署がコンサルタントや請負者（ゼネコンや設備業者など）を選定し契約する場合の標準的な約款として、FIDICの契約約款を採用しています。このような背景から、国際的にプロジェクトを受注し、施工、施工監理、維持管理などの業務をおこなっているコンサルタントやゼネコン等にとっても、FIDICの契約約款は必携のバイブル的役割を担っているといっても、過言ではありません。

FIDICの契約約款（最新版）は、その対象に応じて、表紙が色付けされ、一般的に表紙の色で呼称されています。代表するものとして、『発注者/コンサルタント間の標準役務契約条件書 2006年 第4版』（通称：White Book）、『建設工事の契約条件書 1999年 第1版』（通称：New-Red Book）、『プラント及び設計・施工の契約条件書 1999年 第1版』（New-Yellow Book）、『エンジニアリング・資機材調達・建設までのターンキープロジェクト契約条件書 1999年 第1版』（通称：Silver Book）、『簡略的契約条件書 1999年 第1版』（通称：Green Book）が上げられます。

これらの契約約款の解説書として、White Book Guide（2001年、第2版）FIDIC Contract Guide（2000年、第1版）が出版されました。解説書は、オリジナルの契約約款の逐条解説となっており、オリジナルの約款を理解する上で大変有用なものです。FIDIC Contract GuideはNew-Red Book、New-Yellow Book、及びSilver Bookを条項ごとに比較・解説したもので、これらFIDICを代表する契約約款の相違を俯瞰するには、最適な解説書といえます。

2005年にFIDICは、世銀等の多国間開発融資銀行

（MDB）向けに、『建設工事の契約条件書 2006年 MDB版』（Red Book MDB、Harmonized Edition）を出版し、現在、MDB版が国際融資銀行の標準的な土木建設契約約款となっています。なお、MDB版の一般条件書は、FIDICのホームページから無料でダウンロードできますので、興味のある方はFIDICホームページ（<http://www.fidic.org/>）にアクセスしてみてください。

国土交通省の「建設工事標準請負契約約款」は、FIDICのRed Bookと類似点が多く、Red Bookを参考に起草されたのではないかと、思われます。

これらの契約約款に加え、FIDICは『浚渫・埋立て事業契約条件書』（Blue Book）、『設計・施工・運用契約条件書』（Gold Book）等も出版しており、これらの契約約款の総称として、「FIDIC レインボー」の愛称で呼ばれております。

FIDIC契約約款は、コンサルタントと弁護士などの専門家から構成される、「FIDIC契約委員会」のもとで執筆されたもので、約10年のインターバル毎に、改訂版が出版されています。FIDICが誇れることとして、これらの執筆作業は、基本的に「契約委員会」のボランティアによって行なわれていることです。執筆の過程では、各国の会員協会、融資機関、各国政府の調達部門等からの意見聴取、契約約款の使用状況、社会・経済の変化、メーカーやゼネコン等の関係者との協議等が繰り返し実施されています。

今回は、シリーズ（その1）として代表的なFIDIC契約約款の概要を紹介しましたが、シリーズ（その2）からは、今回紹介できなかった他の多くの契約約款やFIDICからの出版物、更には、今回紹介したFIDICの代表的な契約約款を個別に取り上げ、掘り下げた紹介等も企画しております。今後とも、漏らさないように

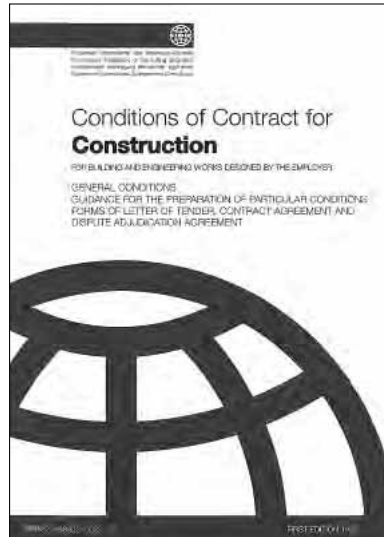
会報を最後までご拝読頂ければ、続編を探し当てられることでしょう。FIDIC 契約約款に触れ、今後の業務の強力なツールとして役立てて頂ければ幸甚です。

FIDIC レインボー



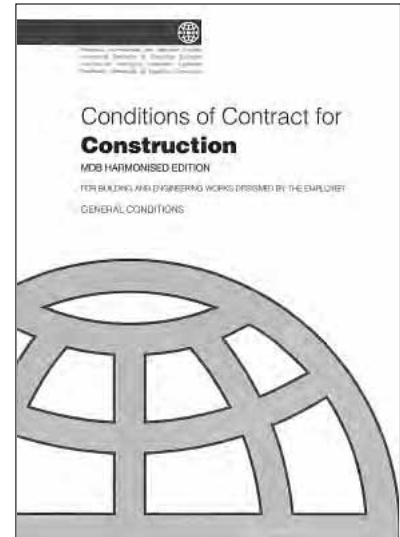
White Book

『発注者/コンサルタント間の標準役務契約条件書 2006年 第4版』



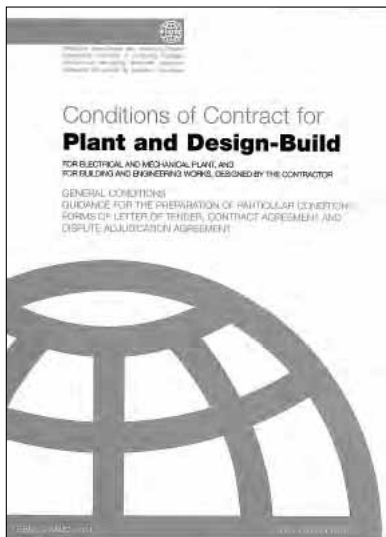
New-Red Book

『建設工事の契約条件書 1999年 第1版』



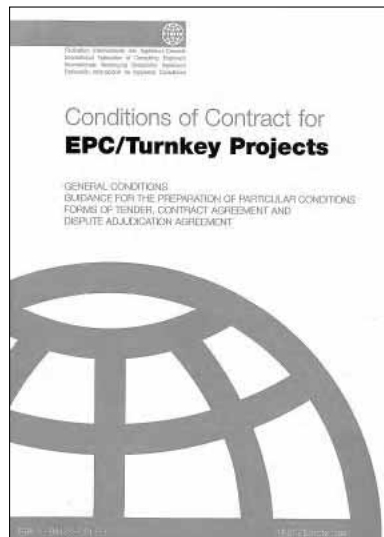
Red Book MDB

『建設工事の契約条件書 2006年 MDB版』



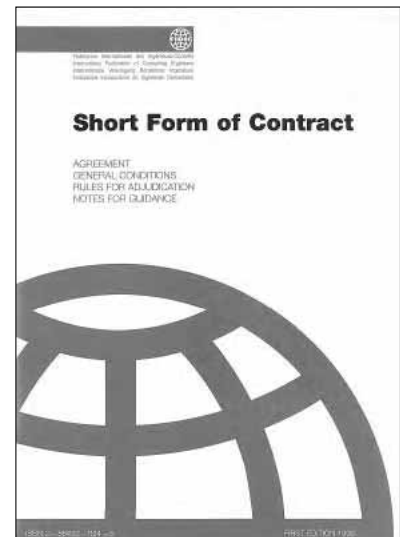
New-Yellow Book

『プラント及び設計・施工の契約条件書 1999年 第1版』



Silver Book

『エンジニアリング・資機材調達・建設までのターンキープロジェクト契約条件書 1999年 第1版』



Green Book

『簡略的契約条件書 1999年 第1版』

FIDIC・AJCE 出版物目録をAJCE ホームページに掲載しています。

http://www.ajce.or.jp/book/book_fidic-ajce01-1.htm

事務局報告

- 1 - 第218回理事会 報告

日 時：平成19年12月11日（火）

14：00～17：00

場 所：AJCE事務局

出席理事：14名

出席監事：2名

議 事：

1. 会員委員会 報告・審議

会員増強

2. 倫理委員会 報告・審議

3. 政策委員会 報告・審議

受託事業

新公益法人制度

4. 総務財政委員会 報告・審議

総務財政に係る規定の改定

5. 国際活動委員会 報告・審議

ASPAC / TCDPAP 韓国大会参加

6. 技術研修委員会 報告・審議

日豪交換研修 10月12日～11月2日

AJCE年次セミナー 11月20日（火）

7. 広報委員会 報告・審議

8. 技術交流委員会 報告・審議

継続教育セミナー 12月7日（金）

9. 事務局報告

平成20年「新年賀詞交歓会」

理事改選準備

ベトナムとのMOU

10. その他

KENCA講演報告 11月9日～11日

- 2 - 日豪交換研修 報告

今年はオーストラリア協会の若手技術者6名をAJCE会員企業が受け入れました。

研修生受入期間：

平成19年10月12日～11月2日

研修成果は、本会報に掲載しております。



- 3 - AJCE年次セミナー 報告

日 時：平成19年11月20日（火）

13：30～17：30

場 所：（株）日本工営 会議室

テ ー マ：「設計・施行一括契約（DB方式）におけるコンサルタントの役割」

本セミナーの概要は次号会報及びAJCEホームページに掲載いたします。



- 4 - 平成20年新年賀詞交歓会新年 ご案内

日 時：平成20年1月9日（水）

18：00～20：00

場 所：日比谷 松本楼（日比谷公園内）

- 5 - 臨時総会 ご案内

日 時：平成20年3月11日（火）

13：00～17：00

場 所：学士会館（本郷分館）

- 6 - その他 行事予定

平成20年2月12日（火） 第219回理事会

平成20年5月13日（火） 第32回定時総会

編集後記

新年号の特集は、世界に姉妹協会をもつ当協会ならではの研修制度である日豪交換研修です。この研修は、グローバルな発想を持つ技術者の育成を目指すために、1996年にスタートしました。研修生は企業研修だけでなく、その国の文化を学ぶためにホームステイも行っていたので、当時、大変な話題となりました。

そして昨年、10年を機に大幅な見直しを行い、新プログラムをスタートさせました。新プログラムによって、日本におけるホームステイ研修はなくなりましたが、企業および個人間の意思疎通を一層強める工夫がされております。もし、まだこの研修に参加されていない方がおりましたら、是非一度参加してみてもは如何でしょうか。
(広報委員会・都丸 記)

広報委員会からのお願い 会員各位の自由な投稿をお待ちします

コンサルティングエンジニアを取り巻くいろいろな問題を、もっと自由に議論し、より身近なものとして捉えていく場を提供したいとの考えから、会員の皆様からの原稿を募集し、随時掲載していきたいと考えております。会報を通して皆様方が伝えたい意見、体験報告等をお送り下さい。

氏名、所属、タイトル、ご執筆者のプロフィール(200字程度)、連絡先(電話番号等)を明記の上、3,000~4,000字程度の分量にまとめて、事務局宛にEメール、ファックス、郵送にてお送り下さい。写真・図表等も加えて頂ければより良い読み物となります。

AJCE 会報新年号

2008年1月10日発行

発行 社団法人 日本コンサルティング・エンジニア協会 (AJCE)
東京都台東区上野3丁目16番4号 文行堂ビル3F
TEL 03-3839-8471 FAX 03-3839-8472
URL <http://www.ajce.or.jp/> E-mail: info@ajce.or.jp

編集 広報委員会

デザイン・レイアウト 株式会社 大應
東京都千代田区内神田1-7-5

会員一覧（平成19年12月11日現在）

（普通会員・52社）

株式会社アイ・エヌ・エー
秋山技術士事務所
株式会社明野設備研究所
池田技術士事務所
いであ株式会社
株式会社エヌジェーエス・コンサルタンツ
OYOインターナショナル株式会社
有限会社大塚エンジニアリング
有限会社大野化学機械工業所
大本俊彦建設プロジェクト・コンサルタント
株式会社オリエンタルコンサルタンツ
技術士大野壽彦事務所
基礎地盤コンサルタンツ株式会社
有限会社クープラス
栗原環境技術研究所
黒澤R & D技術事務所
株式会社建設技研インターナショナル
株式会社建設技術研究所
国際航業株式会社
桜井技研
清水技術士事務所
創造工学研究所
有限会社高木技術士事務所
武田機械・経営技術士事務所
田中宏技術士事務所
中央開発株式会社
株式会社長大
電気技術開発株式会社
株式会社東京設計事務所
株式会社東光コンサルタンツ
株式会社ドーコン
中塩技術士事務所
長友機械技術士事務所
中西技術士事務所
株式会社中堀ソイルコーナー
株式会社日水コン
日本工営株式会社
株式会社日本構造橋梁研究所
株式会社日本港湾コンサルタント
日本シビックコンサルタント株式会社
日本水工設計株式会社

株式会社パシフィックコンサルタンツインターナショナル
早房技術士事務所
有限会社樋口コンサルタント
平野技術士事務所
プラント設計株式会社
ペガサスエンジニアリング株式会社
株式会社メイケン
株式会社森村設計
八千代エンジニアリング株式会社
株式会社山下水道設計事務所
湯浅技術士事務所

（賛助会員・8社 4名）

株式会社石垣
株式会社荏原製作所
株式会社クボタ
住友信託銀行株式会社東京中央支店
社団法人全国地質調査業協会連合会
社団法人日本建築家協会
株式会社日立製作所
前澤工業株式会社東京支店
落久保 博明
海藤 勝
小泉 淑子
竹村 陽一

（企業内個人会員）

173名

（五十音順）



Association of Japanese
Consulting Engineers

社団法人 日本コンサルティング・エンジニア協会 (AJCE)
(FIDIC加盟機関)